

優秀賞

地域のつながり

群馬県立桐生高等学校 2年 目崎羽南

私の祖母は今年七十歳になったが、民生委員として地域に貢献する役割を担っている。民生委員というのは、自治体から委託され、その地域の児童や高齢者の見守りをしたり、支援の必要な家庭を福祉サービスに繋げるための協力をしたりする活動をしている。もともと世話好きの人だから、この「仕事」は祖母にはピッタリだと、私は思っていた。

夏のある日、祖母は学校に行く私を「暑いだろうから」と車で駅まで送ってくれながら、民生委員としての活動について話してくれた。聞けば、酷暑の続く中で熱中症になる高齢者が出ないように、近所の独居老人世帯を見回りしているのだと言う。私の住む地域は特に高齢者が多く、一軒ずつ声掛けするだけでもかなりの時間を要する。それでも「エアコン使つてね」「体調はどう?」と、一人ひとりの顔を見て気遣う姿はいかにも祖母らしいなと、実際に見ていなくても、その優しい声が聞こえてくるようだった。

そんな中で九十歳で一人暮らしをしているおばあさんの家を訪ねた時のこと。いつものように「大丈夫?」と家をのぞくと、思いもよらぬ答えが返ってきたそうだ。「そつちこそ大丈夫?こんなに暑い中を歩いて。お茶を飲んでいきなよ。」自分より二十歳も上のおばあさんに心配されちゃったと祖母は笑ったが、私はお互いを思い合うそのやり取りを聞いてなんだか良いな、と心が温かくなった。

今、隣近所に住む人に興味がある人がどれだけいるだろう? コロナにより地域での集まりが制限され、私たちはますます他人との繋がりを失いつつある。しかし自分を気にかけてくれる人が一人でも多くいることがどれほど心強いものか。孤独死や虐待などが社会問題になるなか、そこに救いの手を差し出せるのは、やはり地域の繋がりのなだと思う。顔の見えないSNSでは繋がるのも切れるのも一瞬だ。そうではなく、目を合わせ、顔を見て今日も祖母は声を掛ける。「大丈夫?」と。